

佐藤成広・小川政弘作 「たまものII」

音楽 (教会の合唱)

加藤和夫 ああ、きれいだ！ まるで別世界のようだ。おれも聖歌隊に入って歌ってみたいな。

ナレーション 加藤和夫は、クリスチ안의高校2年生。日曜日に教会に行っても、礼拝が終わるとすぐ帰るという生活に、だんだん物足りなさを感じてきていました。それで、“聖歌隊に入りたい”と思ったのです。彼は、同じクリスチ안의同級生で、一番親しい佐々木^{まさし}正志君に相談しました。

和夫 なあ、正志。

佐々木正志 ん？

和夫 笑わないで聞いてくれよ。

正志 なんだ、改まって？

和夫 (まじめな顔で)おれ、聖歌隊に入ろうと思うんだ！

正志 (プツと吹き出す)

和夫 だから「笑うな」と言ったじゃないか。

正志 ごめん！ それで、お前、本当に聖歌隊でやれると思うのか？

和夫 悩みはそこなんだよ。聖歌隊で足引っ張ったりしたら、悪いだろ？

ナレーション 加藤君は、どうしても聖歌隊に入りたいんだけど、自分には才能がないのではないか、問うことで悩んでいたのです。一部始終を聞いて、加藤君は――。

正志 よし、それじゃあ、おれと一緒に毎日特訓だ。加藤に才能があるかどうか、特訓してみれば分かるさ。早速、明日の昼休みに、音楽室で。頑張ろうぜ。

ナレーション こうして、翌日から、厳しい特訓が始まりました。

効果音 (ピアノに合わせた発声練習)

正志 そうじゃないだろう。何度言ったら分かるんだ！ じゃあ、これまず出してみな。

効果音 (ピアノに続いて和夫の声)

正志 じゃあ、それを半音上げて。

効果音 (和夫の調子の外れた声。続いてピアノ)

和夫 (泣き出しそうな声で)やっぱり、おれ、ダメなんだ。おれには歌なんか向いてないんだ。

正志 また弱音を吐く。まだ始めてから3日しかたっていないじゃないか。最初の時の“やる気”はもうなくなったのか？ さあ、もう1回！

効果音 (繰り返し)

正志 ダメだ！ そんなんじゃとても聖歌隊は無理だよ。

和夫 だったら、なんでこのおれに特訓なんかしたんだよ。おれに恥をかかせるためだったのかよ！

正志 とんでもない！ おれが特訓したのは、加藤が神様を信じているからだよ。

和夫 どういう意味だよ、それ？ 特訓をすることと、神様を信じていることと、どういう関係があるんだい？

正志 加藤の“聖歌隊へ入りたい”っていう気持ちは、神様から与えられたものだと思うんだ。聖書にも、「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせて

くださるのです。」(ピリピ人への手紙 2:13)って書いてあるし。だから、その思いは、大切に
しなくちゃいけないと思ったんだ。それに、もしかしたら、ほんとに歌の才能があるかも分か
らないんだし。だから、こうして毎日特訓してるんじゃないか。

和夫 でも、これで聖歌隊に入れなかったら、今までの苦労は水の泡じゃないか。なあ佐々木。正
直に答えてくれ。おれには聖歌隊の中で歌うことができるぐらいの才能があると思うかい？

正志 (言いにくそうに)うーん。今は、現在の段階では、難しいだろうな。

効果音 (ドアが荒々しく開く音。加藤、飛び出していく。)

正志 おい、加藤！

ナレーション 加藤君は、部屋を飛び出していきました。そして彼は、その日の午後の授業を欠席しました。
佐々木君の宣告がひどくショックだったようです。彼は今、学校近くの喫茶店の一番奥の席
で、独り静かに物思いにふけています。

音楽 (喫茶店BGM)

和夫(モノローグ) 結局、おれには歌は不向きだったんだ。おれにはなんの取り柄もないのさ。楽器ができるわ
けでもなし、スポーツは苦手だし、かといって勉強が取り立ててできるわけでもない。おれな
んか、いたっていなくなつておんなじなんだ。そんならいつそのこと…。

ナレーション 彼がそう思って立ち上がった時――。

水島先生 ああ、加藤君、やっぱりここね。

和夫 あ、水島先生。どうしてここが？！

ナレーション それは、彼の教会の聖歌隊のリーダーをしている、水島先生でした。佐々木君が心配して
先生に話したのです。加藤君は、促されるままに、水島先生に自分の気持ちをありのまま
に話しました。

水島先生 …そう。分かるわ、加藤君の気持ち。わたしも音大を滑った時、ほんとに死にたいと思うくら
い悩んだから。

和夫 え、あの、水島先生がですか？

水島先生 そうよ。(おかしそうに)「とても信じられない」って顔ね。ほら、これよ。

ナレーション 差し出した水島先生の左の手首には、痛々しいカミソリ傷の跡がありました。

水島先生 わたし、高校1年の時から、先生に付いて声楽習ってたのね。とっても歌が好きで、学校歳
なんかでもいつも独唱していたし。で、その先生にも、「あなたなら大丈夫だから」って音大
行きを勧められるし、ほかのお友達にも褒められているうちに、自分でもその気になって、3
年になってからは、もうわき目も振らずに勉強して、絶対自信持って試験受けたの。岳Kど、
合格発表の中に、わたしの名前はなかった。そのあと、自分がどうしたのか、まるで覚えて
いないのね。気がついたら、病院のベッドの上だったわ。

ナレーション 加藤君は、瞬きもしないで、水島先生の話に聞き入っていました。

水島先生 その病院に、クリスチャンの方々が定期的にお話に来ていて、わたしのことを聞くと、特に
熱心にいろいろと導いてくださったのね。その時のわたしって、もうあまりにも心の中の空洞
が大きすぎて、自分が生きてることさえ実感できなかった。でも、それがよかったのね、
かえって。聖書の中の、「わたしのもとに来なさい。わたしを信じなさい」(マタイの福音書
11:28、ヨハネの福音書 14:1)というイエス様の言葉を、そのまま受け入れることができたの。
間もなく退院して、この教会に導かれてから、わたし、全く新しい気持ちで、神様を賛美する
歌を歌えるようになったわ。その時に、わたし、分かったのね。神様のものでない才能は、

人を誇らせ、自分の名声のためにそれを用いようとさせる。それは神様のためにむしろ災いだったこと。苦しみを通して、イエス様はこの大切なことを教えてくれた。この痛みを通して、わたしを救ってくださった。あのまま音大に受かって進んでいたら、わたし、どんな人間になったのかと思うと、この傷を見るたびに、本当に、「イエス様、ありがとう」って言いたくなるの。…あらあら、自分のことばかりしゃべっちゃった。ねえ、加藤君、どんな優れた人でも、生まれつきそうじゃないのよ。それに、わたしたちクリスチャンにとっては、いわゆる人間的な才能ってというのは、必ずしも必要じゃないわ。“たまもの”って言葉、知ってるでしょ？

和夫

ええ、よく聞きます、教会で。あの、“賜る”“物”って書く…。

水島先生

そう、そうよ。わたしたちの才能は、神様から賜った、つまり、神様が下さったものなの。神様は、それがどんなものであれ、その人でなければできない能力を、一人一人にお与えになっているわ。そしてそれは、その人の努力によって、神様から増し加えていただけるのよ。

和夫

僕はとてもダメです、先生。

水島先生

加藤君、考えてごらんなさい。どうして自分が聖歌隊で歌いたいと思ったのか。(間)加藤君が与えられたたまものを、ただ神様を喜ばせるために一生懸命に生かそうとしている気持ち。——イエス様は、何よりもそれを喜んでくださるわ。ほら、聖書にこう書いてあるでしょ。(聖書をめくる音)「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」(コリント人への手紙第一 10:31)

和夫

“たまもの”…。“神様の栄光のために”…。でも、やっぱりダメです。佐々木に「モノにならない」って言われました。(泣きそうな声)

水島先生

(おかしそうに)ちょっと薬が効きすぎたのね。聞いたわ、佐々木君に。ハツパをかけるつもりで言ったんだって。大丈夫、加藤君。わたしも時々聴かせてもらったけど、特訓のお陰で、初めのころとは比べ物にならないくらい良くなってるわ。

和夫

でも先生…。

水島先生

加藤君、先生の目を見て。聖歌隊の厳しいリーダーが、お世辞なんか言うと思う？

和夫

先生…。僕、やります！

ナレーション

“与えられたたまものを、神様のために用いる。すべてをささげて神様に仕える。”加藤君は、心の中で、何度もこの言葉をかみ締めていました。

<完>